

離れていても「手渡し感覚」

阪大准教授らがデジタル装置

デジタル「手渡し」装置のイメージ



テレビ会議や通信教育などで離れた場所にいる人とコミュニケーションする際、画面越しでも、紙の文書を対面で手渡しするような感覚が得られる装置を、大阪大学の中西英之准教授らがつくった。相手への親近感を抱きやすくなると期待している。

装置は等身大に映し出されるディスプレイ、受け渡しする動作に合わせて動くロボットアーム、デジタルペンを組み合わせさせた。文字を書いた紙を画面の下の隙間に差し込むと、画面に映った相手の動きに合わ

せて紙が引き込まれ、手渡しのような感覚が味わえる。実際はロボットアームが紙を引き込み、デジタルペンで書き込まれた内容が無線送信され、画面に映った相手の手元の紙に出力される。

研究グループによると、文書の共有にパソコンやタブレット端末のデジタル技術を使うと、人が遠くにいることが強調され、疎遠に感じる場合がある。今回の装置を大學生数十人に使ってもらったところ、対面で手渡ししたように親しみを感じたケースが目立ったという。

中西さんは「将来は3Dプリンターを使って、遠くにいる人にもものを手渡しする感覚も再現したい」と話す。5月末に北海道であった人工知能学会で発表した。

(小堀龍之)